

戦後五十周年記念出版

# 語り継ぐ戦争体験

—平和への願いを込めて—

羽村市





戦後五十周年記念出版

# 語り継ぐ戦争体験

—平和への願いを込めて—

## 羽村市平和都市宣言

世界の平和は、人類共通の願いです。

私たちは、日本国憲法の平和の精神を守り、世界の人びとと手を携えて、戦争の防止と、被爆国としての悲慘な体験から、核兵器のない世界平和の実現に努めます。

平和と友愛の心を育み、多摩川の清流と、花と緑に恵まれた、この美しい郷土「はむら」を未来に引き継ぐことは、私たちの責務です。

羽村市は、戦後50周年にあたり、平和の誓いを新たにし、ここに平和都市であることを宣言します。

平成7年8月10日

羽 村 市



## 発刊にあたって

日本がポツダム宣言を受諾し太平洋戦争が終結してから、早いものでもう五十年になります。昔は「人生五十年」と言いましたが、平均寿命が世界一となった現在の日本人にとっても、五十年の歳月は依然として長いものです。この間、日本社会は大きく変わりました。と同時に、戦争の記憶も次第に忘れさられようとしています。「召集」「空襲」「勤労動員」などの言葉は死語になってしまいました。

このように平和に慣れすぎ、当然のことと思ってしまうと、その有り難さはなかなか実感できません。しかし、今の平和が実現するまでには大変な時代があったということ、多くの尊い犠牲の上に成り立っているということ、私たちは片時たりとも忘れてはなりません。平和とは、常に意識していなければすぐに破られてしまうものです。

平和を願う気持ちは、どなたでも変わりないことでしよう。また、再び戦争を起こしてはならないという気持ちは皆同じことと思います。しかし、私たちの国は過去に戦争をしましたが、今日もこの地球上のどこかで戦争の悲劇は繰り返されています。人類の歴史は、戦いにつぐ戦いの日々でした。

このような過去の悲劇を教訓として、今こそ人間の英知をもって平和な未来を築くことこそが私たちの責任です。

そのためには、戦争を知っている者が、自らの体験を時の流れに風化させることなく、後世に語り伝えていくことが必要となります。戦争というものが、いかに人間の尊厳を踏みにじり、人の運命を弄ぶものなのか、そのありのままを語り継ぐことこそが、真に平和を希求する気持ちにつながるものと思います。

砲弾をかくぐったこと、ジャングルの中で生死の境をさまよったこと、空襲の中を逃げまどったこと、食べ物がなく辛かったことなど、この本に書かれた事實はきつと読者の心に平和の大切さを伝えることでしよう。

今回は、百十九人の方が、戦争の体験を平和のために何とかして語り継いでいこうと、進んで戦争の語り部となってくれました。

この本が、市民の平和の心を育てていくための礎石となることを、私は確信しております。

最後になりましたが、貴重な体験談をお寄せいただいた皆様に、心から感謝申し上げます。

平成七年八月十日

羽村市長

井上 篤太郎

# 目次

羽村市平和都市宣言	羽村市長 井上 篤太郎	3
発売にあたって		4
戦時下のはむらの状況		13
手記		
米軍機P51の機銃掃射で一人死亡	並木 芳松	28
空襲の下でお産	原田 静子	30
終戦時の思い出	青柳 宇一	33
戦争と人間	長谷川 喜市	35
回想 溝の口〰羽村	加瀬 好太郎	38
ただ無心で戦った	相島 勲	41
大戦と抑留 終戦五十周年にあたり	森田 佳和	43
永遠の平和を願いつつ	中村 千代	46
その時 わたし十七歳	山影 幸子	50
悪太郎の死	志賀 一男	53

戦争体験記	山田 三郎	56
赤い雪	漆原 智良	60
語り伝える義務	大塚 勝江	65
時代の一証人として	小山 琢也	69
飢え	佐久 文雄	73
私の戦争体験記	並木 茂一	76
戦中・戦後の学校教育で	渡辺 忠夫	80
私の戦中戦後記	山野 登	83
私の戦争体験	堀 静子	85
私の戦争体験	井澤 紀子	88
戦闘のない戦記	榎戸 一雄	91
戦わざる補充兵	羽村 正春	94
黒い飛行機	小作 シズ	97
生みたての卵	徳澤 節子	100
召集兵の追憶	平井 英次	104
戦時中（現役兵）の思い出	新井 四郎	108
想い	柴田 久一	114

お風呂で思う	.....	柴田	千代
終戦の悲しき年も今日までか	.....	伊藤	富三
あれは夏赤い紙来て兵たりし	.....	野村	榮
疎開してお米に代わる母の帯	.....	吉成	洋子
蚊帳を出て赤紙抱き妻嗚咽	.....	松田	安五郎
玉音のラジオの響き立ちすくむ	.....	金子	朗
麦藁を刺す銃剣の十四歳	.....	大野	英雄
防空壕	.....	石田	アキ子
満蒙開拓青少年義勇軍(義勇隊)	.....	和田	正三郎
忘れ得ぬ出来ごと	.....	後藤	とみ
明日なき日々を異郷に生きて	.....	蒲原	渉
華々しい戦いの陰で	.....	水田	昭
敗戦の日	.....	中野	喜一
私の中学三年、三月十日	.....	西村	信友
戦時下 子供の頃の想い出	.....	内山	幸雄
遠い遠い過去の日をしのびつつ	.....	小作	喜恵子
蒸留水の味	.....	沖本	鐵治

178 175 169 156 152 148 145 140 136 133 131 130 129 128 127 123 120

戦争の話	.....	木内	英美
私の戦争体験	.....	野島	順子
私の戦争体験	.....	金子	保太郎
戦後五十周年を顧みて	.....	清水	晴雄
今、振り返る	.....	田村	正一
戦争の思い出	.....	島田	千恵
廬山で聞いた敗戦	.....	高橋	玲子
入営	.....	下田	孝治
戦争の頃	.....	川口	恵美
私の従軍記	.....	大野	栄一
私の戦争体験	.....	飯塚	重夫
私と戦争	.....	樋口	和子
大陸転戦の思い出	.....	岩波	慎蔵
姫百合の影	.....	近藤	伸三
あの日 あの頃	.....	保坂	和子
陸軍二等兵 羽村純偉の出来るまで	.....	羽村	純偉
私の戦争体験 分倍河原の出来事	.....	石田	ハツエ

254 250 247 243 239 234 231 227 223 213 209 204 200 196 192 188 184

私の戦争体験	.....	志賀 幸雄	257
集団疎開児 思い出と再会	.....	松本 昭子	259
四歳からの記憶をたどって	.....	村岡 功子	262
旧北満州の思い出	.....	渡邊 長次	265
私の太平洋戦争	.....	中野 鈴子	268
一枚の感謝状から	.....	渡邊 静子	271
海防艦「千鳥」の沈没	.....	橋本 利夫	278
戦災	.....	梶井 耕一	282
終戦からの出発	.....	市川 光男	285
戦いに隠された青春	.....	秋山 喜十郎	287
私の戦争体験 学童疎開の記	.....	次田 潤子	292
戦争と両親	.....	森谷 芳江	299
飛行士の妻	.....	小宅 トキヨ	303
忌まわしき戦い	.....	中島 寿男	306
学童集団疎開	.....	西田 貞雄	318
タイムマシンに乗って	.....	西田 小夜子	323

聞き書き

人間万事塞翁が馬	.....	木村 等
初年兵の思い出	.....	西川 庄一
戦争と子供たち	.....	西川 ヒロ
戦争下の女学生	.....	木村 マスミ
マッカーサーの手	.....	臼井 ヒデ
二つの戦地	.....	新井 利一
四十七年ぶりに戻った手紙	.....	野村 好子
青年学校の教え	.....	中村 正市
戦争を語り継ぐこと	.....	足立 義忠
シベリアの冬	.....	中野 政一
島の兵隊	.....	柴田 正雄
工場の寮で	.....	大塚 ワキ
天国から地獄へ	.....	吉崎 寛子
買い出しの日々	.....	山本 千江子
東京が燃えている	.....	唐沢 時司
猛火を逃れて	.....	唐沢 米子

390 386 382 379 375 371 366 361 356 352 347 343 339 336 332 328

生死を分けた十五分	.....	橋本 重雄	395
「特一房」の吉田茂	.....	池田 貞治	400
出征しなかつた者の戦争	.....	指田 利明	404
戦争と女の人たち	.....	岸浪 米子	408
戦時下の上海で	.....	松本 喜美子	412
一難去ってまた	.....	足立 定	416
雪原とジャングル	.....	小作 敏郎	420
特技に助けられる	.....	関口 金之助	425
タンケントの収容所で	.....	清水 幸雄	429
命を救った消し炭	.....	加藤 常蔵	434
機転で逃げだす衛生兵	.....	小林 嘉一	439
車の運転	.....	志村 源太郎	444
我慢と辛抱	.....	長谷川喜恵子他	449
私の戦争体験	.....	清流町内会・清老会	461
あとがき	.....		476

戦時下のはむらの状況



情報局発行「写真週報」

先の日中戦争、太平洋戦争前、羽村市（当時西多摩村）は純農村地帯でした。中でも養蚕が殊のほか盛んでした。

昭和十二年（一九三七年）、日中戦争が始まると、日本は戦争に全てを集中することになりました。翌十三年五月には国家総動員法が発令され、国民生活は全面的に政府の統制下に置かれていったのです。

そしてこの頃から、明治時代からたいへん盛んに行われてきた羽村の養蚕も、次第に衰えてきました。戦時中は全てが配給制でしたが、軍需優先で化学肥料などの生産が少なくなり、配給割当はごくわずかとなったため、桑畑も荒れてきました。また、農家の働き手が兵士として出征したり、政府の命令で軍需工場に徴用されるようになって労働力も不足してきて、養蚕どころではなくなってきたのです。

しかし一方では「事変下ノ養蚕業ハ各種副産ノ要求多ク」として、国から繭の増産と生産の割当も強化されているのです。

昭和十五年（一九四〇）の繭の増産割当は、六千七百六十八貫（約二十五トン）、生産割当は四万七千九十六貫（約百七十六ト



銃剣の訓練

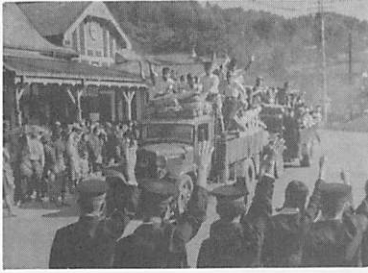


教練で体を鍛える小学生

ン) だったのに対し、実績は四万四千百八貫(約百六十五トン)で、目標の九三・七パーセントにとどまりました。昭和十六年(一九四一)には、荒廃した桑園を中心に、食糧増産のために桑を引き抜いて、後作にさつまいもや陸稲を作付けるよう整理割当がありました。これにより、十八ヘクタールほどの桑園が普通畑になりました。その後も整理割当は更に続けました。

桑の枝の皮は、むいて乾燥され、衣服を作る繊維の原料として供出されましたが、これは主に子どもたちの仕事でした。桑もぎの後、庭でその枝を細い竹の棒二本の間に強く挟んで引っ張ると、皮がはがれるのです。昭和十五年には九百八十三貫(約四トン)が供出されました。この他にも、大麦八百俵、干草三千六十三貫(約十一トン)、アルコール原料用のさつまいも切干し五百七十八俵、梅干し百四貫(約四百キログラム)、軍兔<sup>ぐんとう</sup>百二十二頭と、役場の資料に記されています。生のさつまいも、じゃがいも、野菜など、戦争が激しくなるほど供出割当も厳しくなっていき、農家は戦争に勝つためと必死に、割当目標を果たしたのです。

なお、供出割当は、農林省から東京府(都)へ、そして西多摩



高速移動芸能隊の慰問



負傷兵を見舞いに行く奉公班

地方事務所を通じて西多摩村役場から、更に各地域の農事実行組合を通して個々農家へと、経営面積に応じて決められました。しかし出征兵士の家などは配慮され、その分は皆で少しずつ分担したりしました。

供出品は主として羽村駅に集荷され、食糧事務所の検査を受けました。麦、さつまいも、じゃがいもなどの古い空き俵が何度となく回収され再利用されたので、検査の合格スタンプも前の古いものに×印を付けてから押されたのです。

また、供出に関連して、小学生もどんぐりや茶の実を拾って学校に出しました。廊下の隅に何十俵分も集まりましたが、最終的にはどのように使われたものなのか分かりませんでした。

肥料が少ないのに増産に励むのですから、土地は痩せる一方でした。それを補うため、都内からトラックで尿尿（下肥）が送られてきて、農家はそれを分けて使っていました。しかし昭和十九年頃には、ガソリン不足からトラック輸送もできなくなり、中止となってしまいました。

食糧の不足は、戦争が終わっても急には解消されず、供出制度



必勝・増産を誓って押す血判



合言葉は一億増産

も続きました。

昭和二十三年（一九四八）には、さつまいも二十万六十一貫（約七百五十トン）、じゃがいも十六万三千四百五貫（約六百十二トン）が普通供出により出荷されましたが、米はわずか九・四石で二十四俵に過ぎませんでした。

羽村は水田がほとんどないからです。普通供出のほかに、超過供出として、さつまいも二百五十九トン、じゃがいも二百五十トン、さつま切干し七十二トンも出荷されたと役場の記録に載っています。

戦時中も戦後も、食糧は配給だけでは足りず、遅配、欠配もあったので、東京から食糧の買い出しにくる者も多くありました。農家では、さつまいも、じゃがいもなど供出の残り、自家用の分を少しずつ売ったのです。

食糧は統制品でしたから、警察の取締りの対象であり、買い出しの食糧が駅前で発見されて没収されたり、売った農家もきついお叱りを受けたりしたといわれます。

農家は自分で作っていましたから、飢えることはなかったにせ



飛行機工場で働く女子工員



お母さんも働く隣組工場

よ、決して贅沢に飽食できるような状態ではなかったのです。一方で供出していたかと思うと、もう一方で配給を受けていたのです。

昭和二十三年（一九四八）に、羽村でまったく配給を受けなかった家はたったの七軒、配給のとまる家七百四十軒、配給ばかりの家七百五十八軒と『伸びゆく村』（昭和二十四年刊行）に記されています。要するに米のとれない村だったからでしょう。

### 映画『牛飼う村』

昭和十五年頃、『牛飼う村』という映画が作られました。これは戦時下の羽村という農村を、どのように振興させていったかという、国策宣伝のための映画です。

かつて養蚕に支えられていた羽村の経済も、もはやこの時期にはそれだけでは成り立たなくなっていました。必ずしも農業に最適ではない土地の羽村では、麦やさつまいもなどの農作物では、農村の不況から脱出できません。そこで乳牛を飼うことによって、「銃後」といわれた農村を、戦争遂行のために、このように振興したという、記録映画なのです。



兵士が身につけていた千人針



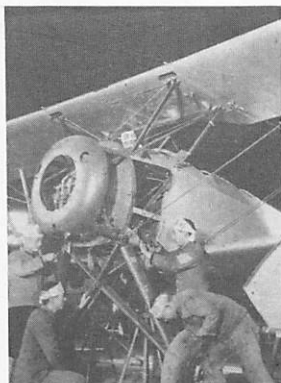
戦地の兵士へ送った慰問袋

この映画は全国で上映されたようであり、羽村から中国に出征した兵士が、現地でそのフィルムを見て感激したという話もあります。

### 疎開

昭和十九年（一九四四）六月、空襲が激しくなると、東京や大阪などの十三の大都市を指定して、国民学校初等科の三年から六年の学童を、田舎に疎開させることになりました。親戚を頼って疎開するのを「縁故疎開」と言い、それができない者は「集団疎開」として、学校ごとにとまって疎開しました。東京からは多摩地域や、他県へ約二十万人も学童疎開したといわれています（一九八八・八・二一・朝日新聞）。羽村へは縁故疎開はかなりあったようで、役場からも空室などの調査があり、農家の蚕室や物置などを、少し改造して住めるようにしました。荷物だけの疎開もあったようです。

羽村への学童疎開は、昭和十九年（一九四四）八月四日、品川区立城南第二国民学校から、東会館へ五十五名、川崎会館へ二十三名入りました。小学校の三、六年生の男女混合でした。同じ学



物資不足で木で作る飛行機



空襲対策にかぶった防空ずきん

校から、瑞穂町へも二百三十名余が、福正寺など五ヶ所に分かれて入りました。

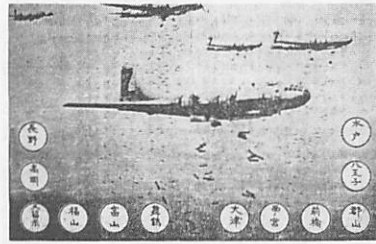
家族が恋しくなったり、空腹や、集団生活の中でのいろいろな問題もあったとみえて、よく泣いている子がいるのを見た、と近所の人と話しています。青年団の人たちも見かねて、時には紙芝居などをもって慰問したり、さつまいもなどの差入れも行ったといひます。東会館、川崎会館とも、先生は一人ずつ、ほかに寮母さんが二人ほどもいました。

疎開学童たちは、終戦になってから徐々に引き揚げ、十月二十五日までに全員帰っていきました。今でも時々、当時学童疎開に来た方々が、羽村に来て過去の思い出を語る会を催しているとのことです。

また、一峰院には、昭和十九年（一九四四）から終戦まで、修練所と呼ばれた都の施設が開設され、徴兵検査に不合格となった青年が五十名ぐらいつつ、三ヶ月間ほどの期間、交代で厳しい訓練を受けていたのです。青梅の天寧寺てんねいじや五日市の広徳寺にも、修練所が開設されたそうです。



空襲で炎上する建物を消火



B29がばらまいた空襲予告ビラ

西多摩国民学校と呼ばれていた羽村第一中学校のところにも、少数の兵隊が駐屯していたこともありました。

**軍需工場**

昭和十八年（一九四三）になると、羽村西小学校のところにあった組合製糸工場・西玉社にしたまやも製糸をやめて、小穴製作所という軍需工場に変わりました。そこではモーターやプラグなどを作るようになったのですが、従業員はほとんど西玉社に勤めていた人たちでした。

空襲の目標にならぬよう、白壁は黒く塗られ、もう使われなくなった製糸工場の高い二本の煙突も、半分に切られていました。それでも昭和二十年（一九四五）五月には、艦載機の機銃攻撃を受けました。

根掘山ねがらみやま（羽加美二丁目、グリーントリムの東側）にも、昭和飛行機工業株式会社の半地下式工場が幾棟も建設されました。半地下式というのは、地面を数メートル掘り下げた中に学校の体育館ぐらいの工場を作り、周囲をその掘った土砂でかこい空襲に備えたのです。工場の従業員は、よそから通勤する人もいましたが、



墜落したB29



疎開してきた人々

羽村に下宿して勤める人も増えました。  
**勤労奉仕**

戦争が激しくなり、兵隊にでた家の手伝いをするのが、小学生の勤労奉仕でした。

生徒の家は多くは農家でしたから、養蚕やお茶摘み、麦刈りなどの農繁期には、学校も農繁期休業で授業は半日で終わりました。家の仕事の手伝いはもちろん、学校から先生の引率で勤労奉仕に出かけ、お茶摘み、畑の草むしり、桑園の除草、麦刈り、陸稲刈りなどを手伝ったのです。昭和十九年（一九四四）ころからは小学校高等科（今の中学一、二年生）の生徒は軍需工場にも動員されていきました。

当時の生徒や学生のはほとんどは、学徒動員として工場や農作業に出勤し、軍隊に行った労働力の不足を補おうとしたのです。

小学生も、履物はわら草履と下駄を自分で作って履きました。また、冬はいくら寒くても、教室にストーブなどありませんでした。



学童疎開の様子



乾布摩擦で体を鍛える小学生

『幾山河』<sup>いくさんが</sup>という本

『幾山河』という、昭和三十四年（一九五九）、羽村町戦争記念誌編集委員会発行の本があります。満州事変以来、日中戦争、太平洋戦争と続いた長く苦しい戦争に、羽村から従軍した人たちの記録です。すべて国のためと信じ、生命を賭けての戦でした。

『幾山河』によれば出征、帰還者の総数は、七百五十六名（『羽村町史』には、八百二十七名。「町づくり年表」とある）、戦死者は二百四十二名（未帰還者数二名を含む）で、このうち十七名は復員後、病氣療養中に亡くなっています。戦死者の中では、フィリピンや南洋の島々での激戦地で玉砕したり、取り残されて、飢えと病気で亡くなった兵士が多かったです。また、沈められた船と運命を共にした々々、千島やアリューシャン列島などの守備隊の戦死者、沖繩戦での七名の戦死者等が含まれています。

終戦後もすぐに帰国できず、長い抑留生活もありました。特に中国東北部からシベリアなどに抑留された方は、この本の記録では四十六名ですが、うち五名は彼の地で亡くなりました。

働き盛りの人の大部分が出征していったのですから、農村に限



疎開した赤ちゃん



予科練の厳しい訓練

らず労働力は不足となり、男子の仕事が担いました。昭和十九年（一九四四）になると、制海権、制空権も次第に失われていき、本土決戦の様相を帯びてきました。外地に出陣を予定しながらも、船舶不足と航海の危険から、待機のまま結局本土にとどまった人も少なくありません。

昭和二十年（一九四五）になると、既に三〇四回も召集された四十歳以上の補充兵や、二十歳未満の若い兵士も志願などで出征しました。これらの人々の中には、本土内で陣地構築に当たったり、また松根油部隊（松の根から油をとり、飛行機の燃料とした）とか農耕隊などという部隊に入り、もっぱら本土決戦に備えていた人もいました。女子も挺身隊として、軍の施設で勤労奉仕をしました。

日中戦争のころは、召集令状（赤紙）がきた兵士の家では、その人の氏名を書いた大きな幟のぼりを何本も立て、出征の時は神社に「武運長久」祈願をしました。青年団員によるブラスバンドで軍歌を歌いながら、大勢で駅まで見送りにいったものでした。しかし戦争末期には、秘密召集といって、こっそりと家を出なければ



別れの盔を交わす特攻隊員

ならない召集もあつたのです。

大都市は次々に空襲で焼かれていき、B 29爆撃機の大編隊が、上空を通過していても、もはやそれを迎え撃つことも少なく、ほとんどなすがままといったありさまとなりました。

それでも本土決戦になれば、まだ飛行機も軍艦も隠してあるから一気に勝負をつけることができる」と報道され、国民も半信半疑ながら期待していたものです。

八王子の空襲の時（昭和二十年八月一〜二日）は、火災で照らされたB 29の翼が、羽村でも大きく光って見えました。

これほど大きな犠牲をはらって、現在の平和があるのです。いつまでも、世界の人々が、真に平和であることを願ってやみませ

羽村市教育委員会発行『羽村の歴史』より

写真資料提供 西村信友氏 小林嘉一氏 指田利明氏 橋本重雄氏